

J-2.992:3

3079

* Kanyokyu

67/14
C

咸陽宮

内十二回

荊軻は期したる」と執勢ひ鋭くかつて急に謀ふ。
琴の段は艶麗に品よく充分に優美に謀ひ、
「時移る」より強吟となり、以下気を掛け執勢を付け、
さらりと急の位にて運び、こけぬ様に謀ふべし。

能の異式(小書)

二三返之傳……琴の段の中に、謀ひ方につき習ひあり。

語釋

咸陽宮……咸陽の地にある故名づく。秦の始皇ここに
都して、修繕を加へ壯大なる工事を施したり。此秦
の都は燕の国の太子、丹といふ人質となりて居たり
しが、始皇の無禮なるを怒りて、国に逃げ帰り、何と
かして此恨に報いんと思ひめぐす頃、秦の將軍に
樊於期といふもの、罪を得て燕に逃げ来りしかば、
遂に之に諷して自殺せしめ、其首と燕の地圖とを
荊軻、秦無陽の兩人に持たせて、始皇を刺さんと謀
りしに、花陽夫人の琴の音に妨げられて、得果さ
りしことを作曲せし故咸陽宮といふ。

雲路を渡る雁がねも云々……源平盛衰記に、
「鉄の築地を高くつきたれば、雁の来り帰ることも叶
はざりければ、築地の中に雁門とて穴を明けたるあり。

轅門……轅門とは、軍陣にて車のながれを立て、門と
するをいふ。

石に立つ……思ひの末は石にも矢の立つといふ諺にいひかけ
たり。

高札……源平盛衰記に「始皇も宿意深き敵な
り」とて、四海に宣旨を下して、樊於期が首取る進み

たらんには、五百斤を與ふべしとぞ披露しけしとあるをさす。

燕の指圖……燕の東に督亢といふ地あり。良く肥え
たる土地なれば、之を始皇に獻せんとして、先づ其地圖
を捧ぐるなり。こゝには略して燕とのみいふ。指圖は、

地を示したる圖の意。それを箱に入れて持参せしなり。
てんごく……は典獄。獄事を司ふ役人の名。

まんもんを解いて……門を開くこの意。

大床……大廣間といふに同じ。

胡床……腰を掛くるもの。

劔の影……源平盛衰記に「指圖の箱に入れて一尺寸
の仙必の劔といふものを隠し入れた」とあるをさす。

あさましや聖人に云々……秦の趙高、二世皇帝に説ひ
て曰く、「天子所以貴者、但以聞聲群臣莫得見
其面」といひしをいふ。

尙千九百四十五年四月

ポストン觀世會發行 (非賣品)

咸陽宮

作者不詳

梗概

秦の都はその周圍萬八千三百餘里、内裏咸陽宮は地より高さこと三里、殿の築地方四里、その高さ百餘丈。中に三十宮あり、帝の御殿は阿房宮と稱し、東西九町南北五町に及ぶ。始皇(シテ)即ちその内にあり、花陽夫人(ツレ)侍女(ツレ)大臣(ワキツレ)等その側に侍す。時に燕國の志士荊軻(ワキ)秦舞陽(ワキツレ)の二人、始皇が燕國の地圖と樊於期の首とを天下に求めしを見て、始皇を刺すはこの機なりと、地圖の箱に匕首を藏して参内す。かくとも知らぬ始皇は喜び節會の儀式を以て二人を引見し、箱を開かしむれば、底に劍の影見えたり。驚き脱れんとせしに二人その袖を捉へて將に刺さんとす。始皇僅かに一葉を棄じ、花陽夫人の琴の音を間待つべしといひ、二人これを許す。夫人乃ち秘曲を盡すほどに、二人その妙音に恍惚として醉夢に陥る。始皇その隙を窺ひて難を遁れ、二人は却て八裂に處せられぬ。

曲 攝 四、五番目(略初能)

季節 十月

稽古 順 一級

所 支那陝西省關中道咸陽

謠ひ方

皇帝の威嚴を以て堂々と始皇に中頃琴の段は優美艷麗に、後は位を進めて確かりと謠ふ、変化の多き曲なれど後みなく謠ふべし。

△シテ堂々と威を籠め重んじりと謠ひ出し、地との掛合も威風凛々々と、大臣との掛合も落着いて、「かに荊軻」より閑かに詠かに、「荊軻が控へた」とかつてさうりと謠ふべし。

△ツレ后 調子高くさうりと謠ふ。

△ワキ 餘り位を持たず確かりと、手強くさうりめに謠ひ出し、上歌も淀みなく、大臣との掛合は確かりと凡て手強く謠ふべし。

△ワキツレ秦舞陽 ワキよりは少し位を軽く謠ひ、連吟の処はよく調子を合すべし。

△ワキツレ大臣 單にさうりと謠ふ。

△地 始めのシテとの掛合は、シテの位を受けシテよりさうりと謠ふ。「げに理とて」とさうりと、

側次

恰も法被の袖なきに似て、
袷に作り、兩側に欄あり、本
曲はワキワキツレ、他曲には鉢木
全れのシテ、吳服のシテツレ
舍利笈六天のツレ天鼓、邯鄲
羅生門のワキ等に着す。

釵

本曲はくは一疊臺の掛布の
縁に挿みあり、

ワキ之をとりてシテの胸に

擬す、(禪師曾我冬照)

他に白皇帝、鐘馗、一角仙人、
張良、禪師曾我等に用ふ。

装束附 (咸陽宮)

シ テ秦始皇帝	直面唐冠 金地鉢卷 襟白漆黄 着附厚板唐織 半切 袷狩衣 繡紋腰帶 唐團扇
ツ レ花陽夫人	面連面 鬘 鬘帶 天冠 襟赤 着附摺箔 緋大口 唐織坪折 縫腰帶 爪紅扇
ツ レ侍女二人 又ハ五人	面連面 鬘 鬘帶 天冠 襟赤 着附摺箔 緋大口 唐織坪折 縫腰帶 爪紅扇
ワキツレ大臣三人	洞烏帽子 着附厚板 袷狩衣 白大口 繡紋腰帶 扇
ワキ荊軻	着附厚板 白大口 側次 繡紋腰帶 小刀 扇
ワキツレ秦舞陽	着附厚板 白大口 側次 繡紋腰帶 小刀 扇
作 物	一疊臺
小道具	釵二(シテ用、ワキ用)

玉の階の金銀を磨きて輝けり。唯

日月の影を踏み蒼天を渡る心地

て。おのおの肝を消すとかやおの

おの肝を消すとかや。思ひ立つ。

朝の雲の旅衣落葉重なる。風かな

山遠うしては雲行客の跡を埋み

松高くしては風旅人の夢を破る

地 地
三十^ニ六^ニ宮^ニあり^ニ。真^シ珠^{ジュ}の^ニ砂^{イサゴ}溜^ル璃^リの^ニ
砂^{イサゴ}。黄^コ金^{ガネ}の^ニ砂^{イサゴ}を^ニ地^{スチ}に^ニは^ニ敷^シき^ニ長^{シテ}生^{チヨウセイ}
不^フ老^ロの^ニ日^ジ月^ツ含^ゲま^ニで^ニ。蔓^{イラカ}を^ニ並^ナべ^ニて^ニ夥^{オビタム}し^ニ
帝^{ミカド}の^ニ敷^テは^ニ阿^ア房^{ホウ}宮^{キウ}。銅^{ドウ}の^ニ柱^{ハシラ}三^{サン}十^{ジュウ}六^{ロク}
丈^{シテ}東^{トウ}西^{セイ}九^ク町^{チウ}。南^{ナン}北^{ホク}五^ゴ町^{チウ}。五^ゴ丈^{シテ}の^ニ幟^{ハタ}
矛^{ボウ}龍^{リウ}車^{シャ}の^ニ雲^{クモ}居^キ。さ^{シテ}な^ナが^ナら^ラ天^{テン}に^ニ
飄^{ヒルガヲ}り^ニ。登^トれ^レば^ニ玉^{タマ}の^ニ階^{キハシ}の^ニ登^トれ^レば^ニ
上^{ウエ}歌^カ同^{ドウ}。拍^{ハク}子^シ合^カ。登^トれ^レば^ニ玉^{タマ}の^ニ階^{キハシ}の^ニ登^トれ^レば^ニ

いかに奏聞申し。燕の國の傍に。

荊軻秦舞陽と申す兩人の者。高

れ。の表に任せ。燕の指圖の箱。竝に

樊於期が首を持ちて。これまで。

内申して。何と申すぞ。燕の國

の民に。荊軻秦舞陽と申す兩人

の者。燕の指圖の箱。竝に樊於期が

手強志

ワキ

たとひ轅門は高くとも思ひの末は

確力

ワキ

ワキ

三全歌

元カカラリ

ワキ

元ハ成シ

石に立つ

梅子合

やたけの心あらはれてやた

けの心あらはれて遠山の雲に日を

重ねやうやう行けば名も高き咸

陽宮に着きにけり咸陽宮に着き

にけり

ワキ詞確力

急ぎん程に咸陽宮に

着きてん

まづ奏聞申さうずるにて

秦舞陽と申す兩人の者指圖の箱。

竝に樊於期が首を^{コオベ}持ちて^{シテ}冬内し

たると申すか^{大臣サラリ} ^{シテ}急いで^{シテ}冬内

させんへ^エ ^{大臣サラリ}畏^{気ヲカヘ}つて^{シテ}唯今の由を^{シテ}奏

聞申してあれば。急いで冬内させ

よとの宣旨^{センヂ}にてあるぞ。さりながら

は^{スム}大法^{タイホオ}の如く。太刀刀^{タチカタナ}を^{ナンゲンアツ}汝預かり^エゆへ

首^{コオベ}を持ちて、冬^{サン}肉^{ダイ}たる^シと申すか。

かるめ^シでたき事こそなけれ。やがて

奏聞^シ申しゆべ^シ。いかに奏聞^シ申しゆ。

燕^{ケン}の國の民に、荊^{ケイ}軻^カ秦^{シン}舞^ブ陽^{ヨウ}と申

す。兩人の者。燕の指^{サシ}圖^ズの相。茲^ハに樊^{ハン}

於^ネ期^キが首^{コオベ}を持ちて、唯今^{シテ}冬^カ肉^ニ申

して、何と燕の國の傍^{カタワラ}に、荊軻

ワキレサアリ

大^{タイ}法^{ホオ}にてゆ^フは^ハぶ^ブたる^タを^セら^レれ^エへ

ワキ 確カリ

さら^シば^シ冬^{シヨ}ら^オせ^セる^ルにてゆ^フ

ワキ 上^ウラ^ラー^{ケイ} 狂言^{キヤン} 拍子^{ウチ}合^{アヒ}ス^ス 荆^{セイ}軻^カ

は^ハ佩^{ハイ}劔^{ケン}を^ノ解^トいて^テ威^キ儀^ギを^ナし^シ節^セ會^エ

の^ノ儀^ギ式^{シキ}に^ニ從^{シタ}ひ^ガて^テ雲^{ウン}上^{スム}遙^{ハル}か^カに^ニ見^ミ渡^ワ

せ^セば^バ金^{キン}銀^{ニン}珠^{シュ}玉^{ギョク}の^ノ市^シ階^{カイ}を^ヲ踏^フみ^ミ三^{サン}

里^リが^ガ間^マを^ヲ登^{ノボ}り^リ行^{ユク}け^ケば^バ薄^{ハク}氷^{ヒョウ}を^ヲ踏^フ

む^ム心^{シン}地^チて^テ荆^{セイ}軻^カは^ハ既^{スデ}に^ニ登^{ノボ}れ^レど^ドも^モ

狂言

△へ畏^カつて^タいかに方々へ申し^カい。急いで

成^{サシ}参^{ダイ}内あれもの御事にていさう

ながら。成^{クハ}大法^{ホオ}の事にてい間^マ面々^{オモ}の

太刀刀^{タチ}を預^{カタナ}かり申して参^マ内させ申

せとの御事にていぞ。太刀刀をたま

けりい^{マキ}いかに^{サシ}秦舞陽^デ。太刀刀を^{ヨオ}

参らせよと承^マりい^タが何^{ナニ}とけりい^カべき

窺^{ウカガ}は^ワざる^{カル}は^{スラリ}驪^{リョ}龍^{リョ}の^ハ蟠^{ワダカマ}る^ニ所^ニを^ニ知^コら

す^ヨ同^同げ^{確カニサラリ}に^ニ理^エと^ニて^ニん^ニご^ニく^ニは^ニさ^ニる^ニも^ニ

嚴^キき^ス林^キ中^チに^チ轅^エ門^{モン}を^ニ解^トいて^ニ許^ニ

し^スけ^スり^ス轅^ス門^スを^ス解^スいて^ス許^スし^スけ^スり^ス

大^サ臣^{ラリ}帝^ミは^{カド}これ^キを^コ聞^キし^コる^コ。臨^リ時^シの^ジ節^セ會^ケ

を^オ執^トり^ト行^オひ^ナ。燕^エ使^シの^ニ冬^サ内^ンを^デ待^イち^ニ給^モ

ふ^オ舞^ハ陽^ニ荊^ニ軻^ハは^ワ大^オ床^ニの^ユ胡^コ床^ニに^シ冬^ニ着^ク

マツレ^{サリ}ハ^ト

後に立ちたる秦舞陽身體わたり

き手をおいて登りかねてぞ休ら

ひける ^{マツレ^{サリ}ハ^ト 詞^ハカ^ツテ^ハ確^カリ} あゝ不覺なりとよ秦舞

陽。燕の賤き住居にならつて。玉

殿を踏む恐ろさに臆してより

かねけるか ^{マツレ^{サリ}ハ^ト 詞^ハカ^ツテ^ハ確^カリ} それをなさのみ諫め

給ひそ。その磧礫に習つて。玉淵を

確カリスラリ
カル上弓

元カケサリ

同

拍子合

困ルズ心

拍子合

カツテスラリ

如く見えければ既に立ちあがり給は
んとす 荆軻は期したる事なれ
ば御衣の袖にむんずと纏つて剣を
御胸にさめて奉りけり 浅まし
や聖人人にまみえずとは今この時
にてありけるぞや あら浅まし
御事やな かに荆軻秦舞陽も

半

シテ詞閑カニ離カリ

申しけり。まづ秦舞陽進み出で。
樊於期が首を皇帝の上覧に供へ
立ちのけば、大臣は笑める御氣色。
御心も解けて見え給ふ。その時

荆軻進み寄つて。燕の指圖の箱
の蓋を開き、上覧に供へ立ちのけば、
不思議やな箱の底に劔の影。氷の

シテ詞心持シテ確カリ

ワキ詞先カ確カリ

○琴之段独吟

と思ふはいかに ワキ気ヲカク いかに秦舞陽ぞて
何とあるべきぞ ワキツレウケニカサリ これ程まで手籠め
申すとは片時の御暇ならは冬らせ
られゆへ エ ワキ確カリ さらば片時の御暇を冬ら
せり シヨ オ ずるにて シテ 閑カニ室シモリ いかに花陽夫人急
ぎ ヒ キヨク 秘曲を奏し給へ エ ツレ上ホ スラリ さらば秘曲を
奏すべし。もとより妙なる琴の音に。

確かに聞け。われ三千人の^{キサキ}后を持つ。
 その中^{ナカ}に花陽夫人^{クラヨオウフジン}として^{コト}琴今の^{ジョウ}上手^{オウズ}
 あり。されば毎日^{マイニチ}急^{オコタ}る事なし。然れ
 ども^{キヨ}け^オは汝等^{ナンドラ}が冬^{フユ}内^{ウチ}により。未だ^{イマ}
^{コト}琴今の^ネ音を聞かず。殊^{コト}更^{サラ}今は^{サイ}最^ゴ期^キな
 れば。片時^{ヘン}の^{スジ}暇^{イトマ}をくれよ。かの^ネ琴今の^ネ音を
 聞^クいて。黄泉^{グラオセン}の道^{ミチ}をも免^{マヌ}れ^{リヨ}う^オずる

聲^{ナミダ}も涙^{ナミダ}の露^{スミ}の玉^{タマ}章^{サハ}。たまさかに。
 たまさかに。人はよも白糸^{シラヒ}の調^{シラ}めを
 改めて。君^{キミ}聞^キけや君^{キミ}聞^キけや。七尺^{シチセキ}の
 屏風^{ビョウブ}は。躍^{ハネ}らば心^{ココロ}越^コえつべし。羅穀^{ラコク}の袂^{タビ}
 をも引^ヒかばなにか切^キれざらん。謀臣^{ボウシン}は。
 有^ウ無^ムに酔^ユへり。群臣^{グンシン}は。聖人^{セイジン}の御助^{ミタスキ}け
 と。おし返^{マゼ}。おし返^{マゼ}。二三返^{ニサンマゼ}の現今^{キマタ}の

飛ぶ鳥も地に落ち武ちも和らぐ程の
秘曲なれば。ましてや今はの玉の緒
理今。さこそは御手も盡されけめ
同上 優ミヲタリ
拍子合 ス化の春の琴曲は花風樂に柳花苑
柳花苑の鶯は同じ曲の轉り。月の
前の調めは夜寒を告ぐる秋風雲
居に渡れる雁がね理今柱に落つる聲

て。銅の御柱に。立ち隠れさせ給ひ

かば 荊軻は怒りをなして

同 鈕を帝に投げ奉れば番の醫師は

薬の袋を鈕に合はせて投げ止め

ければ帝又鈕を抜いて帝又

鈕を抜いて。荊軻をも秦舞陽をも。

八裂衣に裂衣を給ひ忽ちに失ひおはし

口を留る習ひアリ其
時唯眠れるが如く
なりト返シテ語り

同

音^ネを^甲君^一は^ヲ聞^{ハル}し^マ召^一さ^一る^一れ^一ど^一も^一荊^一軻^一
は^{心持シ}聞^{ハル}き^マ知^スら^一で^一た^一後^{心持シ}々^{ケル}と^一侵^マさ^一れ^一て^一。
眠^ネれる^一が^一如^一く^一な^一り^一。^口時^{トキ}移^{ウツ}る^一。^{心持シ}時^{ケル}移^マると^一。
秘^{確カリ違ヒ}曲^一度^一々^一重^一な^一れ^一ば^一。^{心持シ}荊^{ケル}軻^マが^一控^{ヒカ}へ^一た^一る^一。
御^ギ衣^一の^一袖^一を^一引^ツつ^一て^一。^{心持シ}屏^マ風^{フウ}を^一躍^{ラド}り^一。
越^コえ^一。^{心持シ}電^{デン}光^{クワウ}の^一。^{心持シ}激^{ゲキ}す^一る^一よ^一そ^一ほ^一ひ^一霰^{アヲ}散^ラの^一。
白^{シラ}玉^{タマ}盤^{バン}に^一落^オち^一て^一。^{心持シ}柵^ラ干^{カン}を^一走^ハる^一心^一地^一し^一。

まし。その後燕丹を子をも。程なく
滅ぼし秦の帝代萬歳を保ち給ふ
事。たゞこれ后の現今の秘曲ありがた
かりけるためしかな。